

## エツツェル版『パルムの僧院』の異文：テキストの修正をめぐって

高木, 信宏  
九州大学大学院人文科学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/1495146>

---

出版情報：Stella. 33, pp.175-194, 2014-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン：  
権利関係：

# エッツェル版『パルムの僧院』の異文<sup>\*</sup>

——テキストの修正をめぐる——

高 木 信 宏

スタンダールの没後、1845年にロマン・コロんとピエール＝ジュール・エッツェルは全集出版の契約を交わし、同年末に第1弾として『パルムの僧院』を上梓した<sup>1)</sup>。企画そのものは早くも翌年の『赤と黒』配本後に暗礁に乗り上げてしまうが、ふたりが並々ならぬ意欲をもってこの仕事に取り組んだことは、『パルムの僧院』の付録の内容が端的に示している。終生にわたり交誼を結んだ従弟コロンの手になる略伝は、作家の生涯にかんする第一級の資料的価値を有し、バルザックの許諾をえて再録された「ベール氏論」は、両作家の資質や作風を相照らす本格的な奥の深い批評であり、今日もなおその魅力は色褪せることはない。しかも編者たちはバルザックの評論にスタンダールの未刊の礼状を対置することで<sup>2)</sup>、両者の文学観の相違をいっそう際立たせることに成功したのである。

スタンダール研究の道を拓き、文学史においても記念碑的な意義をもつエッツェル版『パルムの僧院』の学術的な価値は、もちろん受容史研究の領域にのみ存するのではない。コロンの校訂した本文は少数ながら興味深い異文を含むものの、管見するところその由来についてはまだ検討の余地が残されている。作家は生前、来たるべき第2版の刊行に備えて初版のテキストに手を入れ続けたが、エッツェル版の異文となる加筆が行われた時期の特定は、修正過程の全貌を捉えるうえでの予備的研究としても欠かすことはできない。小論では、関連する資料の再検証を通じてコロンによる改訂の方針や方法を把握するとともに、初版の本文ならびに各手沢本の訂正とエッツェル版の異文との比較検討をおこない、スタンダールが後者を案出した時期やそれらを書き込んだ媒体について新たな仮説の提出を試みる。

## 『赤と黒』と『パルムの僧院』の校訂方法の相違

コロンはいかなる姿勢で『パルムの僧院』の改訂に臨んだのか。問題の検討にあたって留意しなければならないのは、時期を接して出版された『赤と黒』との違いである。あるいは相違が生じた背景といってもいいが、それを見極めることで基本をなす方針や方法が明確になるからだ。まず後者について今までに明らかになった点を整理しておこう。

エツツェル版『赤と黒』に研究者が注目し、また頭を悩ませることになった最大の理由は、本文に重大な異文が含まれていたことにあった。由来にかんする当事者コロンの証言や校正刷りなどの資料が皆無だったため、底本や校訂の実際についての究明は難航したのである。スタンダール研究の泰斗アンリ・マルチノは従弟が作家から訂正の指示書を託され、それにもとづき本文を修正したとする説を唱えたが<sup>3)</sup>、彼らの親密な交友を根拠にした推測であり、賛否が分かれた。やがて真相はトマス・フォン・ヴェーゲサックの指摘によって判明する。異文の正体は、校正済み差し替えページによって訂正される前の本文であった<sup>4)</sup>。これにより指示書にかんするマルチノの説は否定されたが、しかし初版の前テキストがエツツェル版で活字になった原因として、ヴェーゲサックがコロンによる生原稿の使用という新たな仮説を立てたため、今度はその正否に研究の焦点は移ったのである。

各版のテキストの照合を通じて問題を検討した結果、我々はスタンダールの生原稿が組版に用いられたのではないという結論に達した<sup>5)</sup>。意外なことに実際の底本は、1830年11月にルヴァヴァスール書店から上梓された『赤と黒』の初版（8折判2巻）ではなく、翌年3月5日に同書店とユルバン・カネル書店から売りだされた第2版（12折判6巻）だったのである。そうなった理由は特段変わったものではなく、おそらくコロンは出版界の慣行に従って<sup>6)</sup>、両版のうち誤植がより少ないと見なした第2版のほうを選んだにすぎまい。問題の異文が生じた原因については、清刷か差し替え修正がされていない刊本が底本に使用されたためだと考えられる。

もちろん重大な異文が見逃され、そのまま刷られたという事実は、コロンが校訂の際に初版本文との厳密な照合をしなかったことを如実に物語っている。校合それ自体おこなわなかった可能性すらある。しかし今日の学術的な校訂の方法論に照らして彼のやり方を素人の躰きと見なすならば、事の本質を見誤る

懼れがあろう。著書『イタリア・スイス旅行記』を世に問い、18世紀の思想家シャルル・ド・ブロスの書簡集を編んだコロンの経歴を慮れば、校訂の不備には他の原因が与ったように思われる。おそらく、彼が『赤と黒』の改訂に臨み、著者の自家用本にあたって覚書を検分できなかったことが、底本の選定に災いしたのではあるまいか。

スタンダールは自著の改訂を念頭におき、各頁に白紙を挟み込んだ手沢本を特別に誂えて、気の向くまま読み返しては本文に手を入れるのを常としていた。字句の手直しにとどまらず種々の備忘を記すので、これらを読むとその時々作家の考えが窺い知れるのである。『赤と黒』も例外ではなかったが、彼の死後、その自家用本は他の多くの蔵書と共にチヴィタ＝ヴェッキアの友人ドナート・ブッチの手元に残された<sup>7)</sup>。かりにコロンが同書を繕く機会をえていたならば、第2版の本文に第3者が勝手に修正した箇所があることに憤る従兄の書き込み気づき、現代の校訂者と同じく初版のテキストを底本にしたかもしれない<sup>8)</sup>。

その意味ではコロンによる底本の選定は事故だと言えるが、彼が初版の本文との精密な照合をする必要を覚えなかったのには、自身が従兄の執筆を補佐する腹心の友であったという事情が関与している。すでに別稿で『ローマ散歩』や『ある旅行者の手記』の執筆を例にとり確認したように<sup>9)</sup>、スタンダールは文筆活動においても従弟を頼りにし、後者もそれを承知していた。ここでその新たな例証を挙げておこう。作家は1828年12月6日付の書簡で、自分が万一不慮の死を遂げたなら遺稿を出版するようコロンに託している——「一見雑然とした、ローマにかんする僕の草稿を〔…〕ユラレ氏に渡してくれさえすればいい。ユラレ氏なら腰を据えてかなり読みやすい原稿にしてくれるだろう。それを手直ししてから、ドンデイ＝デュプレ氏に売ってくれたまえ」<sup>10)</sup>。

スタンダールが自著の仕上げを任せられるほどには従弟の文才に信頼を置いていたのは確かであり、そういった彼らの関係が最後まで変わらなかったことは、作家の訃報をブッチに知らせるコロンの手紙（1842年3月24日付）が証している——「追伸。コンスタンタンは友人ブッチ氏に対して『イタリア名画解説』の白紙綴じ込み装幀本2巻——その数葉には貴兄の友〔スタンダール〕と私の手による加筆があります——を別にしておくようお願いしています」<sup>11)</sup>。『イタリア名画解説』は1840年8月に画家アブラハム・コンスタンタンの著作として出版されたが、内実はスタンダールが執筆を随分と手助けして出来上

がった本である。問題となっているのは、後者が生前預かって手を加えていた著者用特装本の返却だが、「私の手による加筆」という文言からコロンがこういった仕事でも従兄を手伝っていたことが分かる。

しかしながら、スタンダールとコロンの信頼と協力にもとづく緊密な関係が研究者たちをかえって戸惑わせる結果をもたらした。エッツェル版『赤と黒』には前述した重要な異文のほかにも初版との字句の異同が数多くあるが、そのほとんどはコロンが自らの判断で行った訂正によって生じたと考えられる<sup>12)</sup>。つまりスタンダールの生前に仕事を手伝っていたときと同じ心構えで、表現上の瑕疵を正したのである。コロンにとっては、ごくあたりまえの自然な行為にすぎず、我々がその是非と問うことは無意味であろう。肝心なのは、こうした本文訂正のやり方を彼に特有な方法として認識することである。

以上からはっきりしたように、エッツェル版の『赤と黒』には著者の意図を反映した異文はまったく含まれていない。差し替え刷りによる訂正前の前テキストが活字になったのも、いわば怪我の功名であった。では、同様のことがそのまま『パルムの僧院』の異文にも当てはまるかという点、話はそれほど簡単ではない。というのは、20世紀以降に校訂版を編んだ研究者は皆一様に、スタンダールの修正がコロンによって本文に反映された可能性を認めているからである。

最初にエッツェル版『パルムの僧院』の異文に着目したアンリ・マルチノは、作家がコロンに宛てた1840年5月20日付の書簡を根拠にし、「すべてではないにせよ大半が、スタンダール自身によって遺言執行者である従弟に示された訂正であるのは疑いない」と推測した<sup>13)</sup>。実際に手紙にはこう記されている——「『僧院』を落掌しました、なんともよかった。いずれ君は再訂正を受けとることになるだろう」<sup>14)</sup>。アントワーヌ・アダンはマルチノに与して、「これらの修正の存在」を肯定し、エルネスト・アブラヴァネルも同様に訂正は「スタンダール自身に因る」と見なしている<sup>15)</sup>。

他方、今世紀の校訂版の編者たちは、異文が作家自身の手直しである蓋然性を否定しはしないものの、マルチノの説に手放して賛同してはいない。たとえばミシェル・クルーゼは次のように問題点を指摘する——「コロンが改訂した本文に含まれるこれらの修正は、スタンダール自身が〔手沢本に〕記していたヴァリエーションによっておおかた裏付けられる。幸運にもそれらは作者に由来す

なのだ。だが訂正箇所がコロンの選別やイニシアティブにもとづいていないという完全な証拠はない<sup>16)</sup>。プレイアッド新版の編者フィリップ・ベルティエも同様に慎重な態度をくずさない——「これらの修正が、あるいはそのうちのいくつかは、コロンの改訂版に入ったと考えることはできる。しかし我々にはそのいかなる裏付けもない<sup>17)</sup>。

たしかに<sup>くぶん</sup>件の手紙には、スタンダールがコロンから訂正の入った『パルムの僧院』を受けとり、さらにそれに手直しをくわえて送り返す旨が書かれている。してみれば、ここにもまた「二重の修正」<sup>18)</sup> という形での作家と従弟の緊密な協力関係が認められるわけだが、両者が修正を書き入れた問題の本そのものは見つかっておらず、エツツェル版の異文がはたして問題の訂正に拠るのかについて検証することはできない。

だが、異文の源泉をめぐる近年の考察にはひとつ重大な盲点がある。マルチノ以来の通説を批判的に検討するにあたって新資料への目配りが充分でなく、関連する貴重な証言が見逃されているからだ。それはエツツェル版への「ベール氏論」の転載を快諾してくれたバルザックにコロンが送った1846年1月31日付の礼状である——

大兄がご教示になった修正を『パルムの僧院』の著者があの美しい本に施す前に他界してしまったことを、どれほど私は惜しんだでしょう。彼はそれに真剣に取り組んでいました。私は施すべき変更が記された草稿を手中にし、草案を丹念に吟味しましたが、長らく躊躇したあげく、改善するつもりでかえって損なってしまうのを懼れて、それらを用いないことに決めました。<sup>19)</sup>

ジャック・ウベールの手で1996年になって初めて公にされたこの書簡は、『赤と黒』と『パルムの僧院』とでは、改訂の条件や方法がまったく異なっていたことを教えてくれよう<sup>20)</sup>。後者の出版に際してコロンは、改訂版のための加筆修正が入った数種の手沢本にじっくりと目を通し、そのうえで著者による訂正を採用するか否かを判断できたのである。

『パルムの僧院』の自家用本については今日までに次の3つが知られている。修正用の白紙を各頁の間に綴じて装幀された通称シャペール本とロワイエ本、そして白紙の挟まれていないランゲー＝アザール本である。これらの手沢本の白紙や余白には、加除の訂正のみならず、修正過程の時々作家の頭に浮かん

だアイデアや省察などが記されている。なかでもスタンダールが「ベール氏論」の助言を改訂に反映させるべく用意したロワイエ本の第1巻は、冒頭54頁が削除され、新たな導入部や挿話が書き足されるなど、最も著しい修正の跡をとどめる。しかも綴じ込み白紙の第1葉には、「これは『僧院』の第2版に使用されるための原稿である」<sup>21)</sup>と大きく丁寧な字で題されているだけに、コロンにとってもその扱いに慎重な判断を要したことは想像に難くない。

このように重要な修正が数多く存在したにもかかわらず、コロンは最終的にそれらを探り入れなかった。では、エッツェル版の異文は彼自身の修正に由来するのか。しかしながら、コロンがバルザックに打ち明けたところによれば、けっしてそうではなかった――

したがって、『パルムの僧院』はもとのまま新たに刷られたのです、ただし他界する25日前(1842年2月26日)にベールが第1巻の冒頭10頁ほどに施した軽微な修正を除いて。<sup>22)</sup>

この証言の信憑性に疑義を挟む理由はない。エッツェル版『パルムの僧院』の、少なくとも最初の10頁ほどに認められる異文は、まぎれもなくスタンダールの改削を反映しているのだ。そればかりではない。出所と時期にかんする通説も覆る。すなわち源泉は、1840年5月20日付のコロン宛書簡で話題にされた訂正ではなく、1842年2月26日に作家がおこなった斧正だったのである。だが、なぜコロンはそれらの訂正だけを採用したのか。彼の意図を理解するためには、当時いかなる状況でスタンダールが修正に臨んだのかを振り返る必要があるろう。

#### 1842年の『パルムの僧院』修正の意図

1841年10月22日、病気休暇をえた作家は帰国の途につく。パリでの投宿先にはまずオテル・ド・ランピール、12月下旬以降はオテル・ド・ナントが選ばれた。後者において翌年3月23日、作家は永眠することとなる。賜暇に際して数十冊の蔵書が逗留先に送られているが、そのなかに『パルムの僧院』の手沢本が含まれていたのは疑いない。シャペール本については、1842年1月付の訂正が点在する事実からそう確認できる。ロワイエ本とランゲー＝アザール本にかんしては同種の証拠は見あたらないものの、両者もまたパリにあったことが、

次の理由から推し量れよう。

『赤と黒』の自家用本に関連して触れたように、チヴィタ＝ヴェッキアとローマに残された種々の草稿と書簡はすべてブッチの手でグルノーブルに住む作家の旧友ルイ・クロゼに送られた<sup>23)</sup>。蔵書については、書き込み等がなく状態が良いものは売られたが、それ以外は僅かな例外を除いてほとんどがブッチの手元に残った<sup>24)</sup>。このため、作家の筆蹟をとどめる『アルマンズ』や『赤と黒』の自家用本でさえもイタリアを出ることはなかったのである。こういった事情により、仮に『パルムの僧院』のロワイエ本とランゲー＝アザール本がブッチの管理下にあったとして、これだけが特別扱いされてクロゼに送付されたとは考えにくい。実際コロン、ブッチ、クロゼら3者の交わした書簡には手沢本の移送を示唆する文言は見当たらない。だが現にロワイエ本とランゲー＝アザール本が後者の所有となっている以上<sup>25)</sup>、考えられる可能性はただひとつ、どちらもシャペール本と同じく賜暇の直前にパリへ送られ、スタンダール逝去のときには、その傍らにあったのである。

このことは別の角度からも確かめられる。パリの居所に残された蔵書のうち作家自身の著作は、やはり遺言書にもとづきコロンの手によってクロゼに送られている<sup>26)</sup>。そのなかに『パルムの僧院』の自家用本が含まれていたことは、1844年4月10日に後者が前者に宛てて認めた手紙に明らかだ――

マレストは私に全集のことを話してくれました。そのように決心なさるのなら、思うに、以前お送りいただいた本で、新版のために、とりわけ『パルムの僧院』のために修正が入った数冊を貴兄に返送する必要があります。27)

作家の没後、コロンがクロゼに送ったパリの蔵書のうち、来たるべき全集出版の改訂作業に備えるため、加筆修正の入った『パルムの僧院』の手沢本を数冊、前者に返送する提案だが、このなかにはシャペール本はもとよりロワイエ本もあったはずだ。前掲のバルザック宛書簡のなかでコロンは、従兄が「ベール氏論」の助言に従って修正した草稿を自分は吟味したと回顧しているが、彼の言う「草稿」が特にロワイエ本を指すことは、第1巻・第1葉にスタンダールが記した「バル〔ザック〕氏の助言に対する敬意から修正された原稿」<sup>28)</sup>という一文に照らすならば明白だからである。

それでは、スタンダールが1841年11月8日に始まるパリ滞在に『パルムの



僧院』のすべての手沢本を必要とした理由は何であったのか。むろん彼は病気休暇を利用してテキストに手を入れるつもりだったとは明言できるが、それだけでは自家用本を3つ揃えて携える意図を説明したことにはならない。作家がそう決心した子細、その考えに至るまでの経緯を改めて検討する必要があるだろう。

小説刊行間もない1839年4月11日、スタンダールはパリ街頭でバルザックと遭遇し、来たるべき改訂版のために助言を惜しまない文豪から、修正に協力する約束をとりつける<sup>29)</sup>。同月半ばには初刷り1,200部は完売し、アンプロワーズ・デュボン書店が重版に踏み切ったように、改訂の計画にはわかにかに現実味を帯びてくる<sup>30)</sup>。だが共同修正の話は、スタンダールが6月下旬にチヴィタ＝ヴェッキアに帰任して以降、両者間で連絡が途絶えたことにより自然消滅したようである。イタリアで彼は、白紙を挟み込んだ『パルムの僧院』を装幀させた。これがシャペール本であり、彼は同本を用いて11月中旬にテキストの手直しに着手する。とはいえ、第2版の出版が具体化したわけではなく、作業は思いつくまま自著に手を入れる習慣に従ってのことと考えられている<sup>31)</sup>。

さらに翌1840年6月、スタンダールは新たな重版に備えて本文の訂正をおこなっている。同月11日付の備忘に、「『僧院』130頁の差し替え頁の仕事をしている」<sup>32)</sup>とあるように、それは第2版のための改訂ではなく、当初の眼目はあくまでも差し替え刷りによる初本文の修正にあった。このとき彼が小説第1巻130頁に挿入する目的で作ったのは、登場人物を予告する「エピソード、ワルネイ、ラッシ、その他」と題された挿話だが、推敲は捗しくなく、9月に入っても草案への加筆が続いた。

そうこうするうち翌10月15日、スタンダールの元にバルザックの「バール氏論」が届く。これを契機に重版の計画は中止され、代わって内容を大幅に改めた第2版の出版へと舵が切られた。翌日スタンダールは文豪の助言に従い、小説冒頭を占めるミラノの部分削除する決心をし、同月下旬には新版の原稿にするために、冒頭54頁を取り除いた白紙綴じ込みの自家用本（ロワイエ本）をローマで装幀させている<sup>33)</sup>（なお前述の挿話「エピソード、ワルネイ、ラッシ、その他」は方針転換に伴い、10月末に同手沢本に転写された<sup>34)</sup>）。

これ以降、スタンダールは「今世紀の小説家の王」<sup>35)</sup>によって示された意見を尊重しつつ、テキストへの加除の訂正を続けたのだが、しかし翌年2月初旬、彼の心に修正の方針に対する大きな迷いが生じた。それは冒頭部を元の構成に

戻すという考えが発端だったが<sup>36)</sup>、彼はただちにそう決断するに至っていない。同年4月初め、改めて具体的な意見をバルザックに請うために白紙を綴じ込んだ『パルムの僧院』を作製させ、コロンを介して渡そうと試みたように<sup>37)</sup>、スタンダールはかなり長いあいだ逡巡したのである。結局、両者の間で連絡がうまくつかず、バルザックが特装本を落掌することはついになかった<sup>38)</sup>。

以上のような紆余曲折を経て、スタンダールは1841年10月下旬にはじまる病気休暇を迎えるのである。頼みにしていたバルザックの協力はもはや叶う見込みもなく、おそらく彼は第2版の出版の準備に独力で取りかかる決心をし、帰国の途についたのではなかったか。それゆえ作業に不可欠な手沢本をすべてパリに送ったのであろう。しかも彼には改訂をあまり先延ばしできない、もうひとつの理由があった。

1841年3月15日、作家は以前から前兆のあった脳梗塞の発作に襲われ<sup>39)</sup>、生死の境をさまよう。4月19日付の友人デイ・フィオリ宛の書簡には、「回復したいとは思いますが。しかしこの手紙が最後になるかもしれないので、あなたにお別れをしておきます」と書いている<sup>40)</sup>。10月31日から11月5日まで、彼はパリへ向かう途上でジュネーヴに滞在し、当地の医師プレヴォの診察を受け、夕食をともにした。診断結果や治療法は詳らかになっていないが<sup>41)</sup>、スタンダールの健康が樂觀できない状態にあったのは確かであろう。コロンをはじめ、パリで再会した友人たちは悉く作家の変わり果てた容貌や言動に驚愕し、病状を憂慮している<sup>42)</sup>。スタンダールが自らの宿病を少しも気にかけていなかったとは考えにくく、病の自覚もまた彼を『パルムの僧院』第2版の本格的な準備に踏み切らせた動機に数えることができよう。

1842年のパリ滞在中、スタンダールの体の具合は不安定だったため、小説の修正は体調が好転した折、ほかの創作の合間を縫っての仕事となった。コロンによればエッツェル版の異文は1842年2月26日、つまりスタンダールが他界する25日前に行われた訂正だという。シャペール本の書き込みに付された最後の日付が同年1月23日であり、しかも問題の異文と手沢本の訂正内容とが相同でないからには、作家が2月26日に既存の自家用本に照らしつつ、おそらく別の新しい書冊、未だ存在が確認されていない一揃えの『パルムの僧院』を用いて筆削の作業に着手したと考えられよう。そう仮定するならば、エッツェル版の異文が初版第1巻の最初の9頁分だけなのも腑に落ちる。スタンダールは翌

月 23 日、脳卒中により不帰の客となってしまったため、直せたのは緒言と冒頭数頁だけにとどまったのであろう。さらにこのことから、コロンが 2 月 26 日の訂正のみを採用した理由も推し量ることができる。彼はそれらの修正が記された 1 冊を含め、それぞれの手沢本を照らし合わせた結果、前者にこそ作家の最終的な意思が反映されていると確信したに違いない。

### テキストの修正過程の検証

では、スタンダールによる修正の推移が我々の仮説に合致するか否かを確かめるために、初版のテキスト、手沢本の訂正、エツツェル版の異文を比較対照しよう<sup>43)</sup>。なお後者のうち、各自家用本の該当箇所に対応する訂正がないものについては、註で示すこととする<sup>44)</sup>。

最初の異文は「緒言 Avertissement」の第 1 節に登場する。ここでは割愛したが、ロワイエ本では同じ箇所に鉛筆で×印が付されている。

C'est dans l'hiver de 1830 et à trois cents lieues de Paris que cette nouvelle fut écrite ; ainsi aucune allusion aux choses de 1839.

Bien des années avant 1830, dans le temps où nos armées parcouraient l'Europe, [...] [AD, t. I, p. 1]

C'est dans l'hiver de 1830 et à trois cents lieues de Paris que cette nouvelle fut écrite ; ~~ainsi aucune allusion aux choses de 1839.~~

Bien des années avant 1830, dans le temps où nos armées parcouraient l'Europe, [...] [CH, t. I, p. 1]

C'est dans l'hiver de 1830, et à trois cents lieues de Paris, que cette nouvelle fut écrite. Bien des années auparavant, dans le temps où nos armées parcouraient l'Europe, [...] [H, p. 1]

これらの修正の意図は一見して明らかで、初版が刊行された 1839 年の政治的・社会的な状況にもはや気遣う必要はなくなったため、作家は煙幕となる文言を削除したのであろう。もちろん改訂版を念頭においた修正である。エツツェル版の異文は、シャパール本の訂正を整えた結果と見なせるので、とうぜん作成時期は時間的に後に位置づけられる。

次も同じく緒言にかんする修正である――

[...] Padoue, charmante ville d'Italie ; le séjour s'étant prolongé, nous devinmes

amis. [AD, t. I, p. 1]

ville où l'on s'amuse [CH, t. I, p. 1]<sup>45)</sup>

Padoue, ville heureuse, dont les habitans [sic] songent au plaisir et ne haïssent guère. 20 janvier [18]42 [CH, t. I, Face p. 2]

Padoue, ville heureuse, aimable, dont le plaisir fait la seule affaire et où l'on oublie de haïr. 21 janvier [18]42 [CH, t. I, Face p. 2]

[...] Padoue, ville heureuse où, comme à Venise, le plaisir est la grande affaire et ne laisse pas le temps d'être indigné contre le voisin. Le séjour s'étant prolongé, le chanoine et moi nous devînmes amis. [H, p. 1]

興味深いのはシャペール版の訂正に打たれた日付である。なぜなら、この箇所にかんする一連の訂正が、病気休暇中の1842年に入って始められた事実が見てとれるからだ。修正内容の照合からもエッツェル版の異文が最終形であるのは間違いない。その意味では、ここに我々の仮説を裏付ける例証を認めることができる。また、手沢本の修正に比べて同版の異文のほうはさらに詳しい表現に改められている点から、スタンダール自身の加筆であると推定できる。というのも、エッツェル版『赤と黒』の異文調査によれば<sup>46)</sup>、単語レベルでの書き換えがコロンによる訂正の特徴だったからである。これらの考察は、次例にも該当するであろう――

[...] je ne trouverai guère de soirées comme celle-ci, et pour passer les longues heures du soir je ferai une nouvelle de votre histoire. [AD, t. I, p. 2]

maisons [CH, t. I, p. 2]<sup>47)</sup>

J'ai l'idée d'en faire une nouvelle, à l'exemple du vieux conteur Bandello qui croirait faire un crime en négligeant les circonstances vraies de l'histoire qu'il raconte... [18]42 [CH, t. I, p. 2]<sup>48)</sup>

J'ai l'idée de faire une nouvelle de ce que vous me racontez. À l'exemple du vieux conteur Bandello, je ne négligerai aucune des circonstances vraies qui m'ont intéressé dans votre histoire. 21 janvier [18]42 [CH, t. I, Face p. 2]<sup>49)</sup>

À l'exemple du vieux conteur Bandello, je me garderai bien d'oublier toutes ces circonstances qui m'ont intéressé dans votre nouvelle (← histoire). [CH, t. I, Face p. 3]<sup>50)</sup>

je me garderai bien d'oublier de négliger toutes ces circonstances parce que je suis attaché à votre historien. [CH, t. I, Face p. 3]<sup>51)</sup>

[...] je ne trouverai guère de maison comme celle-ci, et pour passer les longues heures du soir je ferai une nouvelle de la vie de votre aimable duchesse Sanseverina. J'imiterai votre vieux conteur Bandello, évêque d'Agen, qui eût cru faire un crime de négliger les circonstances vraies de son histoire ou d'en ajouter de nouvelles. [H, p. II]

ここでも修正の過程が、日付や書き込みの場所から推定可能である。印刷頁の余白に始まり、ついで白紙の表、さらにその裏へと順を追って修正が書き直されている。ちなみにエツツェル版の異文は、プルーストの響譽を買った一節として知られるが、彼の所有したミシェル・レヴィ版（1857年）はコロンによる改訂版であり、テキストはエツツェル版のそれを踏襲している。プルーストはこの箇所印をつけて、「したがって文学はサバイヨンが美味しい快適なタベと同等でしかないのだ」と書きつけたが<sup>52)</sup>、スタンダールの苦心の跡が偲ばれる箇所だけになんとも皮肉な話である。

緒言に続いて、本文冒頭の数頁を見ていこう。僅かではあるが興味深い修正が施されている――

Au Moyen âge, les Lombards républicains avaient fait preuve d'une bravoure égale à celle des Français, et ils méritèrent de voir leur ville entièrement rasée par les empereurs d'Allemagne. [AD, t. I, p. 8]

Au Moyen âge, les Lombards ~~républicains avaient fait preuve d'une bravoure égale à celle des Français,~~ (← étaient braves) et ils méritèrent de voir leur ville entièrement rasée par les empereurs d'Allemagne. [CH, t. I, p. 8]

Lombards républicains forcenés [CH, t. I, p. 8]<sup>53)</sup>

...Français, aussi méritèrent-ils de voir [18]42 [CH, t. I, p. 8]<sup>54)</sup>

Au Moyen âge les Lombards étaient braves et méritèrent de voir... Monza. Depuis... [CH, t. I, Face, p. 8]

Au Moyen âge les Milanais étaient braves comme les Français de la Révolution et méritèrent... [CH, t. I, Face, p. 8]

Au Moyen âge, les Milanais étaient braves comme les Français de la révolution, et méritèrent de voir leur ville entièrement rasée par les empereurs d'Alle-

magne. [*H*, p. 69]

ここにも 1842 年にシャペール本を用いて始められた修正が、エツツェル版の異文へと段階的に仕上げられていく過程が看取できる。まず本文の余白に訂正が書き込まれ、次に白紙で推敲をするという手順であり、これは先に挙げたいくつかの例に共通する特徴であろう。では、次例はどうか――

[...] il fallait aimer la patrie d'un amour réel et chercher les actions héroïques. [*AD*, t. I, p. 9]

[...] il fallait ~~aimer la patrie d'un amour réel et chercher les actions héroïques.~~ [*CH*, t. I, p. 9]

il fallait aimer quelque chose d'un amour réel et savoir dans l'occasion exposer sa vie. [*CH*, t. I, Face, p. 9]

il fallait aimer quelque chose d'une passion réelle et savoir dans l'occasion exposer sa vie. [18]42. Approuvé. [*CH*, t. I, Face, p. 9]

[...] il fallait aimer quelque chose d'une passion réelle, et savoir dans l'occasion exposer sa vie. [*H*, p. 70]

軽微な手直しではあるが、修正内容の比較から推敲の経過が見てとれるという点では、その重要性は前掲した例に劣らない。同じ指摘は次の箇所にもあてはまる――

On était plongé dans une nuit profonde par la continuation du despotisme jaloux de Charles-Quint et de Philippe II ; on renversa leurs statues, et tout à coup l'on se trouva inondé de lumière. [*AD*, t. I, p. 9]

~~On était plongé~~ (← Les Milanais étaient plongés) dans une nuit profonde par la continuation du despotisme jaloux de Charles-Quint et de Philippe II ; on renversa leurs statues (↓ élevées dans la Piazza dei Mercanti) et ~~tout à coup l'on se trouva inondé~~ (← l'on fut inondé) de lumière. [*CH*, t. I, p. 9]

leurs statues élevées dans la Piazza dei Mercanti [18]42 [*CH*, t. I, Face p. 9]

Par la continuation du despotisme jaloux de Charles-Quint et de Philippe II, les Lombards étaient plongés dans une nuit profonde ; ils renversèrent leurs statues, et tout à coup ils se trouvèrent inondés de lumière. [*H*, p. 70]

最後の例はこれまでとは異なり、最初の訂正が1841年2月5日に遡る。すなわちバルザックの助言を容れてロワイエ本を中心に修正を進めてきたスタンダールが、冒頭部を初版の構成に戻す考えを抱いた時期にあたる――

[...] avec quatre magnifiques régiments de grenadiers hongrois. La liberté des mœurs était extrême, mais la passion fort rare ; d'ailleurs, outre le désagrément de devoir tout raconter au curé, sous peine de ruine même en ce monde, le bon peuple de Milan était encore soumis à certaines petites entraves monarchiques qui ne laissaient pas que d'être vexantes. [AD, t. I, p. 9]

[...] avec quatre magnifiques régiments de grenadiers hongrois. La liberté des mœurs était extrême (←5 février 41 / Les mœurs étaient voluptueuses et faciles), mais la passion fort rare ; d'ailleurs, outre le désagrément de ~~devoir~~ tout raconter au curé, sous peine de ruine même en ce monde, le bon peuple de Milan était encore soumis à certaines petites entraves monarchiques qui ne laissaient pas que d'être vexantes. [CH, t. I, p. 9]

Les mœurs étaient d'une telle liberté que les passions n'avaient pas le temps de naître. D'ailleurs [18]42 [CH, t. I, p. 9]<sup>55)</sup>

La licence des mœurs était extrême [CH, t. I, Face p. 9]

[...] avec quatre magnifiques régiments hongrois. La licence des mœurs était extrême, mais les passions fort rares. Outre le désagrément de devoir tout raconter aux curés, les Milanais de 1790 ne savaient rien désirer avec force. Le bon peuple de Milan était encore soumis à certaines petites entraves monarchiques qui ne laissaient pas que d'être vexatoires. [H, p. 70]

ここで注目すべきは、1841年2月5日から翌年の手直しまでに約1年の空白期間が認められる点である。それはおそらく修正方針をめぐるスタンダールの迷いに起因している。2月初旬にいったんは小説の構成を元に戻そうと考えたものの、4月には白紙を綴じた装幀本をバルザックに委ねて意見を請おうとしたように、彼の逡巡は長引いた。修正箇所が小説の冒頭部に含まれているだけに、比較的長期にわたる中断は、決断をためらうスタンダールがバルザックからの返信を虚しく待ち続けた期間に相当すると考えられる<sup>56)</sup>。

以上の考察によってエツェル版の異文の大半が1842年に入って行われた修正に属することが明らかになったと思う。修正内容を照らし合わせた結果でも、推敲の過程において同版の異文は手沢本の訂正の後に位置づけられよう。前掲

したコロンの証言を否定する根拠はどこにも認められないのである。

### 結論にかえて

我々にとって残る問題は、スタンダールが修正に用いた媒体の特定である。エツェル版の異文と同一の訂正が3つの手沢本のいずれにも確認できないからには、それらとは別の刊本に訂正は書き込まれたはずである。小論を終えるにあたり、想定される第4の自家用本にかんする仮説を述べておきたい。

1841年春にスタンダールがバルザックに渡すためコロンの託した『パルムの僧院』の装幀本は未だ発見されていない。連絡の齟齬から後者が特装本を渡せなかったとすれば<sup>57)</sup>、同年の11月にパリで従弟と再会した作家は、むしろこれを回収したはずだ。翌年に入るや、彼がロワイエ本ではなく、シャパール本を選び、緒言に続いて小説の冒頭部分に手を入れたのも、バルザックの助言を離れ、テキストを初版の構成に戻す最終的な決断をしたからであろう。そうしたなか、真っさらな白紙が綴じられた問題の『パルムの僧院』を目にするうち、スタンダールがその新たな使い道を思いついたとしても不思議はない。修正を浄書する機が熟したか、それとも自らの健康を憂慮し焦ったか、いずれにせよ彼が未使用の特装本を第2版の原稿にすることに決め、それをを用いて1842年2月26日に本文を訂正した可能性は皆無だとはいえない。そうだとすれば、作家の死後、この本はいったいどうなったのか。

バルザックのためにスタンダールが誂えた装幀本は、おそらくコロンのとつても、白紙が綴じ込まれているだけに利用価値は大きかったはずである。エツェル書店から『パルムの僧院』を出版するにあたり、彼もまた印刷所に渡す原稿としてこの自家用本を流用することに決めたのではあるまいか。前述したように19世紀前半の出版界の慣行では、改版の際には先行する刊本のうち最も信頼のおけるエディションが原稿に選ばれた。つまり活字になった本文が原稿の役目を果たしたのである。むしろ『パルムの僧院』の場合、選択の余地はない。作家の遺言執行者にとって初版を綴じ直してつくられた問題の特装本は原稿としての条件を満たすばかりか、すでに最初の10頁ほどに修正が書き込まれているうえ、ほかの未使用の白紙は彼が自らの裁量で字句の訂正をしたり、印刷所への指示書をしたりするのに打ってつけだったのであろう。

さて、かかる推測が正しければ、装幀本のその後の運命については悲観せざ



るをえない。同様の目的から当時印刷所で使用された多くの書籍とたがわず、用済みになった後は工房の片隅で忘れ去られ、処分されたか、災禍に遭ったか、いずれ不幸な末路を辿ったのではなかったか<sup>58)</sup>。スタンダールがバルザックに送ったとされる『バルムの僧院』特装本の行方は杳として知れず、もはや我々研究者の探索の手が届かない幻の一書となってしまったようである。

## 註

- \*) 本稿は「JSPS 科研費：課題番号 24520363」の助成を受けた研究の一部である。
- 1) 出版年は1846年と記載されている。Voir STENDHAL, *La Chartreuse de Parme*, précédée d'une notice sur la vie et les ouvrages de Beyle, par M. COLOMB ; suivie d'une étude littéraire sur Beyle, par M. de BALZAC, et d'une lettre inédite de l'auteur en réponse à ce travail, Paris : J. Hetzel, 1846 [1845], frontispice.
  - 2) エッツェル版に収録された1840年10月30日付バルザック宛書簡は、コロンが手紙の3草稿を組み合わせてつくった、いわば贋作であり、本物は見つかっていない。彼が贋造するに至った経緯については次の拙論で検討している——«Une lettre d'outre-tombe : Balzac et l'édition Hetzel de *La Chartreuse de Parme*», *HB, Revue internationale d'études stendhaliennes*, n° 18, 2014, pp. 355-368.
  - 3) Voir Henri MARTINEAU, «Introduction» au *Rouge et le Noir* de STENDHAL. Texte établi avec introduction, bibliographie, chronologie, notes et variantes par H. MARTINEAU, Paris : Garnier Frères, coll. «Classiques Garnier», 1939 [1961, p. XXXIII].
  - 4) Voir Thomas von VEGESACK, «Les cartons de *Rouge et Noir*», *Stendhal Club*, n° 75, 15 avril 1977, pp. 260-263.
  - 5) これについては次の拙論を参照——«Texte et variantes : au sujet du texte de base de l'édition Hetzel du *Rouge et le Noir*», *HB, Revue internationale d'études stendhaliennes*, n° 17, 2013, pp. 297-309.
  - 6) Voir Henri FOURNIER, *Traité de la typographie*, Paris : Imprimerie de H. Fournier, 1825, pp. 42-43.
  - 7) Voir Gian Franco GRECHI, *Catalogo del fondo stendhaliano Bucci*, a cura di G. F. GRECHI. Prefazione di Victor DEL LITTO, Milano : All'Insegna del Pesce d'ore, coll. «Biblioteca stendhaliana», 2 vol., 1980-2001, t. I, p. 242.
  - 8) Voir Yves ANSEL, «Note sur le texte», in *Œuvres romanesques complètes* de STENDHAL. Préface de Philippe BERTHIER, Édition établie par Y. ANSEL et Ph. BERTHIER, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 3 vol., 2005-14, t. I, p. 981. スタンダールは第2版の校正にかかわっていないと考えられている。

- 9) 前掲の拙論を参照—— «Une lettre d'outre-tombe : Balzac et l'édition Hetzel de *La Chartreuse de Parme*», *art. cité*, pp. 362-363.
- 10) STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition Victor DEL LITTO avec la collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E. SLATKINE, Paris : Libr. Honoré Champion, 6 vol., 1997-99, t. III, p. 697.
- 11) DEL LITTO, «Prefazione», in *Catalogo del fondo stendhaliano Bucci*, *op. cit.*, t. I, p. XL.
- 12) この点にかんしては次の拙論を参照—— «Texte et variantes : au sujet du texte de base de l'édition Hetzel du *Rouge et le Noir*», *art. cité*, pp. 298-301.
- 13) Henri MARTINEAU, «Notes et Variantes», in *La Chartreuse de Parme* de STENDHAL. Texte établi avec introduction, bibliographie, chronologie, notes et variantes par H. MARTINEAU, Paris : Garnier Frères, 1942, p. 529.
- 14) STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, p. 347.
- 15) Voir Antoine ADAM, «Variantes, corrections et projets», in *La Chartreuse de Parme* de STENDHAL. Texte établi avec introduction, chronologie, bibliographie, notes, relevé des additions projetées et des variantes et dossier documentaire par A. ADAM. Édition illustrée de 16 reproductions, Paris : Garnier Frères, 1973, p. 583 ; voir aussi Ernest ABRAVANEL, «Préface» pour *La Chartreuse de Parme*. Texte établi, annoté par E. ABRAVANEL, in *Œuvres complètes* de STENDHAL. Nouvelle édition établie sous la direction de Victor DEL LITTO et E. ABRAVANEL, Genève : Cercle du bibliophile, 50 vol., 1967-74, t. XXIV, pp. LX-LXI.
- 16) Michel CROUZET, «Préface» pour *La Chartreuse de Parme* de STENDHAL. Édition critique contenant les notes et additions de STENDHAL. Texte établi à partir de l'édition originale, présenté et annoté par M. CROUZET, Orléans : Éd. Paradigme, 2007, p. LXVIII.
- 17) Philippe BERTHIER, «Note sur le texte» pour *La Chartreuse de Parme*, in *Œuvres romanesques complètes*, *op. cit.*, t. III, p. 1226.
- 18) Voir CROUZET, «Préface» pour *La Chartreuse de Parme*, *op. cit.*, p. LXVIII.
- 19) STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, p. 753.
- 20) Voir Jacques HOUBERT, «Autour d'un anniversaire : une lettre inédite de Romain Colomb à Balzac», *Le Courrier balzacien*, n° 62, 1996, p. 33.
- 21) Victor DEL LITTO, «Corrections et additions inédites pour la deuxième édition de *La Chartreuse de Parme*», *Stendhal Club*, n° 31, 15 avril 1966, p. 200.
- 22) STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, p. 753.
- 23) イタリアに残された作家の草稿や書簡がブッチからクロゼに送付された経緯は、両者およびコロンの書簡によって詳細に辿ることができる。Voir *ibid.*, pp. 594, 653, 662, 663, 664, 669 et 675.
- 24) Voir Michel CROUZET, *M. Mysself ou la vie de Stendhal*. Nouvelle version. Ouvrage

- publié avec le concours du Centre National du Livre, Paris : Éd. Kimé, 2012, p. 694.
- 25) デル・リットはロワイエ本が草稿類と共にチヴィタ＝ヴェッキアからグルノーブルへ送られたと考えているが、ただし確かな根拠は示されてない。Cf. DEL LITTO, «Corrections et additions inédites pour la deuxième édition de *La Chartreuse de Parme*», *art. cité*, p. 198.
- 26) 1837年9月27日付の遺言書にもとづき、作家の著作と遺稿はクロゼが相続した。Voir STENDHAL, *Correspondance générale, op. cit.*, t. VI, pp. 66 et 652.
- 27) *Ibid.*, pp. 702-703.
- 28) DEL LITTO, «Corrections et additions inédites pour la deuxième édition de *La Chartreuse de Parme*», *art. cité*, p. 200.
- 29) Voir François BRONNER, «L'exemplaire de *La Chartreuse* offert à Balzac», *L'Année stendhalienne*, n° 6, 2005, pp. 349-353 ; Jacques HOUBERT, «Quand un H.B. rencontre... un autre H.B.», *Le Courrier balzacien*, Nouvelle série, n° 19, avril 2012, p. 10 ; voir également Nobuhiro TAKAKI, «Une lettre d'outre-tombe : Balzac et l'édition Hetzel de *La Chartreuse de Parme*», *art. cité*, pp. 361-362.
- 30) Voir CROUZET, «Préface» pour *La Chartreuse de Parme, op. cit.*, p. LXVII.
- 31) Voir Victor DEL LITTO, «Préface», in *La Chartreuse de Parme* de STENDHAL. Exemplaire interfolié Chaper. Préface, transcriptions et notes par V. DEL LITTO, Paris : Cercle du Livre Précieux, 3 vol., 1966, t. III, pp. 11-12.
- 32) STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor DEL LITTO, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1981-82, t. II, p. 391.
- 33) ロワイエ本第1巻冒頭の54頁のうち25頁から54頁までは同巻の印刷最終頁(130頁)の後に綴じられている。Voir STENDHAL, *La Chartreuse de Parme*. [Paris : Ambroise Dupont, 1839] Exemplaire conservé à la Bibliothèque nationale de France, 5 vol., t. I, fol. 95 recto.
- 34) Voir DEL LITTO, «Appendice», in *La Chartreuse de Parme, op. cit.*, t. III, p. 115.
- 35) スタンダールはこのような敬称を1839年3月29日付のバルザック宛書簡や同じ頃に贈呈した『パルムの僧院』の献辞にも記している。Voir BALZAC, *Correspondance*. Édition établie, présentée et annotée par Roger PIERRO et Hervé YON, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 2006-11, t. II, p. 469 ; voir également Alfred HERVÉ-GRUYER, «Une découverte : un exemplaire dédié de *La Chartreuse de Parme*», *L'Année stendhalienne*, n° 4, 2005, p. 296.
- 36) Voir DEL LITTO, «Préface», in *La Chartreuse de Parme, op. cit.*, pp. 25-26.
- 37) Voir BALZAC, *Correspondance, op. cit.*, t. II, p. 878.
- 38) 前掲の拙論を参照—— «Une lettre d'outre-tombe : Balzac et l'édition Hetzel de *La Chartreuse de Parme*», *art. cité*, pp. 357-362.
- 39) Voir Victor DEL LITTO, *La vie de Stendhal*, récit de V. DEL LITTO, Grenoble /

Paris : Éd. du Sud / Albin Michel, 1966, p. 314 ; voir aussi CROUZET, *M. Myself ou la vie de Stendhal*, *op. cit.*, p. 676.

- 40) STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, pp. 468-469.
- 41) Voir Philippe BERTHIER, *Stendhal. Vivre, écrire, aimer*, Paris : Éd. du Fallois, 2010, p. 459 ; voir également CROUZET, *M. Myself ou la vie de Stendhal*, *op. cit.*, p. 684.
- 42) Voir *ibid.*, p. 685 ; voir aussi BERTHIER, *Stendhal*, *op. cit.*, pp. 459-460.
- 43) 引用に際しては、初版 (STENDHAL, *La Chartreuse de Parme*, par l'auteur du *Rouge et le Noir*, Paris : Ambroise Dupont, 2 vol., 1839), シャペール本, エッツェル版のそれぞれを AD, CH, H と略記し, 頁数と併せて [ ] 内に示す (初版とシャペール本にかんしては典拠の巻数も付す)。なおエッツェル版とシャペール本の出典・書誌情報については, 註 1 と註 31 を参照のこと。カッコ内に記された «Face» は, 修正語句が当該頁に面する白紙に記されていることを表す。引用文中の削除線はスタンダール本人による。本文中に挿入された語句には「↓」を, 削除後の代替語句には「←」を付し, いずれも ( ) 内に表示する。
- 44) エッツェル版の異文のうち手沢本には該当する修正がないものを, 初版テキストと併せて以下に示す——

[...] je vais vous donner les annales de mon oncle [...] [AD, t. I, p. 2]

[...] je vais vous prêter les annales de mon oncle [...] [H, p. II]

Les Italiens de cette nouvelle sont à peu près le contraire. [AD, t. I, p. 4]

Les Italiens de cette nouvelle sont fort différents. [H, p. III]

Les miracles de bravoure et de génie [...] [AD, t. I, p. 7]

Les miracles de hardiesse et de génie [...] [H, p. 69]

[...] après des siècles de sensations affadissantes [...] [AD, t. I, pp. 8-9]

[...] après des siècles d'hypocrisie et de sensations affadissantes [...] [H, p. 70]

[...] ce peuple autre fois si terrible et si raisonneur, [...] [AD, t. I, p. 9]

[...] ce peuple autre fois si terrible, [...] [H, p. 70]

- 45) 印刷頁の余白に書き込まれた代替案。
- 46) これについては次の拙論を参照—— «Texte et variantes : au sujet du texte de base de l'édition Hetzel du *Rouge et le Noir*», *art. cité*, pp. 298 et 301.
- 47) 印刷頁余白に書かれた修正案。クルーゼは «maisons» ではなく «maison» と読んでいる。Cf. CROUZET, *La Chartreuse de Parme*, *op. cit.*, p. 3 (note c).
- 48) 印刷頁余白の代替案。クルーゼは «de négliger» と解している。Cf. *idem*.
- 49) クルーゼによれば «du vieux Bandello». Cf. *idem*.
- 50) クルーゼの解説では, 最初 «nouvelle» は «bouche» と書き換えられ, その後 «histoire»

とされているという。Cf. *idem*.

- 51) クルーゼは «attaché à votre histoire» と読んでいる。Cf. *idem*.
- 52) Nathalie MAURIAC DYER, «L'exemplaire annoté de *La Chartreuse de Parme*», *Bulletin d'Informations proustiennes*, 2005, n° 35, p. 11 (en collaboration avec Daniel FERRER).
- 53) 印刷頁余白への修正案。
- 54) 同上。
- 55) 同上。
- 56) スタンダールはバルザックの助言を請うために 1841 年 4 月 4 日に手紙を送り、5 月 28 日には後者が白紙綴じの装幀本を受けとったかどうかをコロンの尋ねている。7 月中旬にはシャペール本の第 1 巻 43 頁に字句の訂正をし、48 頁には備忘を書いている。僅か 1 箇所とはいえ冒頭 54 頁に含まれる修正であることから、バルザックの協力を諦め始めた作家の心境をここに見ることも可能だ。とはいえ、訂正が 1 箇所だけにとどまった点も併せて考えるならば、完全に断念したとも言い切れない。
- 57) 次の拙論を参照——«Une lettre d'outre-tombe : Balzac et l'édition Hetzel de *La Chartreuse de Parme*», *art. cité*, p. 364.
- 58) 作家が他界した際、パリにあった蔵書は遺言書に従ってコロンによりしかるべく整理された。著作や遺稿はクロゼに送られており、バルザック用に白紙を綴じ込んで装幀された『パルムの僧院』も他の自家用本と同様にクロゼに届けられたはずだが、その記録も形跡もない。他の蔵書はコロンが相続し、一部は形見として同者から友人たちへ贈られている。後年オーギュスト・コルディエがコロン相続分の目録を作成したが、『パルムの僧院』にかんする記載はない (voir Adolphe PAUPE, *La vie littéraire de Stendhal*, Paris : Libr. Honoré Champion, 1914, pp. 77-90)。作家の残した断簡零墨の保存に努めたコロンだが、彼がスタンダールの意思を汲み、問題の書帙をエツツェル版の原稿に流用したことはありうる。そうであったならば、当時の印刷所の慣習により、問題の特装本は彼の手元には戻らなかったと考えられる。